

ヴィゴツキーと内言の意味論

—— フレデリック・ポランとの交差において ——

神 谷 栄 司

はじめに

ヴィゴツキー(Выготский, Л. С., 1896~1934)が人生の最後に書き下ろした『思考と言語』第7章「思惟と語」(1934/1999)は、言語と心理をめぐる多様な問題への示唆を含んでいるとはいえ、全体として見るならば、内言(内的言語)論の本格的な論究に満ちあふれている。その考察に命を与えているものは、彼が摂取したフレデリック・ポラン(Paulhan, Frédéric, 1856~1931)の「語の意味」論(Paulhan, 1928)である(後述する、「語の意味の語義に対する優越性」などにおいて)。

ポランの所説から語の意味に関する予備的・形式的な規定を示しておこう。——「語の意味 le sens とは、もっとも広い語意では、その語が精神のなかによび起こし、精神の反応が拒絶せずに受け入れて組織するところの、心理学的諸事実の全総体である」(1928, p. 289)。意味はその内部に同心円をなすいくつか(基本的には3つ)の領域から構成され、そのうち相対的に安定的な領域が語義 la signification である(1928, p.291, p.294, p.311)。ヴィゴツキーもほぼこの規定を受け容れている(1934/1999, c. 322)。だが、この規定は問題の入口に過ぎない。肝心なことは、ポランとヴィゴツキーはこのように規定された構造において語の意味の変動・発達を把握しようとしたことにある。

語の意味(さらには語そのもの)が歴史的に変化するものであることを否定する人はいまい。それどころか、私たちは日々、主として若者のことばのなかに、種々の造語や語の意味の変動を見出している。日本語を例にとれば、「全然」という副詞は否定のみならず肯定を強めるというように両義的となり、現在若者が多用している「ヤバイ」「～すぎる」も同じように両義的な述語となってきた。トレネのシャンソン「詩人の魂」が洒脱なメロディにのせて謳うがごとく、学術的な語(概念)とは違って、最初にそれを用いたのは誰か、ということは、問題になりえない。語の新しい意味(すぐに消滅するものも含めて)は人々の生活のなかで生まれたと言う以外になく、少なくとも確かなことは、神や、君主や、政府や、言語学者や、国語審議会のような人為的な機関が、人々の生活の外部から新しい意味をもたらしたのではないことである。人々がその生活過程で産み出し、その使用によって淘汰したり変更させたりし、歴史的に蓄積しつつあるものが、語とその意味である。とすれば、個人のレベルでの語の意味の変動、新しい意味生成のメカニズムの解明を抜きにしては、ことばの本性は十全に理解したことにはなら

ない。

ポランもヴィゴツキーも直截にはそのように述べていないとはいえ、彼らが行おうとしたことの意義は、客観的には、上述のようなことである。具体的には、上記の意味構造がどのように流動し変動していくのか、の解明である。一方はパロール(話しことば)の次元において、他方は内言の次元において。

なお、フランス語とロシア語と日本語の語がその語義を完全に一致させることはありえないので、これは絶望的な試みと言うほかはないが、小論では、おおむね、la signification [シニフィカション]、значение [ズナチャーニエ] を「語義」、le sens [ソン]、смысл [スミスル] を「意味」と捉えている。

I. フレデリック・ポランにおける《語の意味構造》

ポランのオリジナル・テキスト

ヴィゴツキーの『思考と言語』には、彼がその内容を摂取したポランの論文について、実は、出典が明示されていない。ロシアの神経言語学者アフーチナの論文(1984)の註11には、「ヴィゴツキーはポランの名をあげながらも、いかなる出典も示していない。ヴィゴツキー著作集〔1982-1984〕の註記には『ポラン(Polan), フレデリック——フランスの心理学者』と〔だけ〕記されている。ア・ア・レオンチェフ(1969b)は次のように出典を示している——F. Paulhan. La double fonction du langage. Paris, 1929 [ポラン：言語の二重の機能]。〔だが〕この書物を注意深く検証したが、ヴィゴツキーの行った引用は発見しえなかった」⁽¹⁾と書かれている。その後、アフーチナは、この論文の英訳(2003)にあたって、上記の註に次のように追記している。「2003 Addition: Prof. Alex Kozulin has helped me to find the cited work: Frédéric Paulhan, Qu'est-ce que le sens des mots. J. de Psychologie, v. 15. 1928 [ポラン：語の意味とは何か]」⁽²⁾。

それとは別に、ファン・デル・フェールとヴァルシナー(1991, p.368)は、その著作『ヴィゴツキーの理解』で、ポランへの論評に関してヴィゴツキーが参照した箇所(語義と意味の定義、語の意味の理解とより広い文脈との関連)の出典を示している。その出典も上記のアフーチナの英語論文の指摘する文献と同じものである。おそらくはファン・デル・フェールとヴァルシナーがより早く発見したと考えられる。

こうして、ヴィゴツキー研究に関わりのある4人の研究者が同じ出典をあげていることや、後述することになるが、ヴィゴツキーによる直接的な引用箇所が概ね上記論文に見られることから、前記「語の意味とは何か」がヴィゴツキーの参照したポランの論文であると断じてよいであろう。

ポランの結論より

まず、この論文の結論から始めよう。そこに彼の論文を貫いている根本的視点が現れている

からである。

語の意味は動いているものであり、たえず変わりやすく、全体として決して固定せず、制限され・広げられ・その時の欲求または欲望によって変形されることにいつも準備ができています。〔語の意味が〕明確にされたり遮られたりするのとは、その時・その個人・その機会にとってであり、それを取り囲む他の諸語によって、様々な程度にはあるが、その語を使用する精神と、その精神が生きている社会とが含むすべてのものによって、である。〔語の意味は〕けっしてその完成に至らない。これらのことは、今まで述べてきたことの結果として、明らかである。(Paulhan, 1928, pp.328-9)

語の意味にたいする彼の根本的視点は、意味というものを流動と変動において把握することであり、固定することなく制限されたり拡大されたり変形されたりする絶えざる可能性において掌握することである。それにあたり、ポランは、その語の意味を、とりまく他のことば、その語を使用する精神とその社会とが含むすべてのものといったあらゆる連関において考察しようとしている。と同時に、以下に述べる拙稿を考慮に入れるなら、流動と変動との根底に、具体的個人の次元(「その時・その個人・その機会にとって」の語の意味)をおいていると見なしてよい。考えてみればそれは当然のことで、具体的に発話し、相手の応答に耳を傾けるのは、人類でも社会階層でもなく、話し聞いている個人にほかならず、その点では、語の意味を変動させるものは具体的個人の次元にあり、より正確には、発話し応答しあっている諸個人のあいだにある。

語の意味と文・文脈

まず、語の意味を変動させるメカニズムのうち、ことばに固有な問題から取り上げよう。語義は万人の使用に共通する一つの抽象であり、これなしには語は成立しないが、語義そのものは形式的定義のように内容的には貧しいものであった。語義が意味となり、抽象が具体に近づいていく第1歩は、言語の問題として考えるなら、語が文に組み込まれねばならないことである。ポランが言うように、「文字が語のなかにあるように、語は文のなかにある」(1928, p.320)からである。ついでに言えば、人間の最初の有意味語が一語文と呼ばれ、また、話しことばのなかに単語による応答がしばしば聞かれることは、語が文の機能を担っていることを示すのであり、これらは「語は文のなかにある」ことの特例であろう。

次に、文の意味も語の場合と同様に考えられる。ポランが「語の意味がひとつひとつの文字とではなく語の全体と結びついているのと同じように、ひとつの文の意味は〔その文の〕すべての語のあいだで分け合うことなしに文の全体と結びついている」(同上)と述べるように、語義や語の意味を知らなければ文の意味は判らないとはいえ、文の意味は、語の意味の足し算の和ではない。むしろ逆に、その文をはさみ込む前後の文の意味、さらには節の意味によって理解できる。それは、場合によっては、節、章、1冊の書物、さらに、他の著作というように続

いていく。これが文脈である。ポランが言うように、語の意味は、「語・文・章あるいは書物の集積、組み合わせによる以外には、具体的に近づけないし、また、決して完全には具体的に達しない」（同上、p.294）。意味はこのような点では「システムの総合」（同上、p.323）であり、語は、文脈の意味を吸収して、語義のような抽象から具体的に、したがって完全な意味に接近していくのである（完全には到達しないとはいえ）。ポランはそうした意味の運動を「語の意味の潜在能力 la virtualité」（同上、p.328、ヴィゴツキーもこれに類した概念 *потенция* を使用している）と呼んでいる。

そのような意味のシステム化を、ポランはナポレオン・ボナパルトという固有名詞と歴史的な文脈（たとえばオーステルリッツから全ヨーロッパの支配に駆け登っていくナポレオンとワーテルローからセントヘレナ島へと没落するナポレオン）、近代フランスの文学や哲学における語の意味（たとえばテヌの「芸術における理想」、地球の概念の宇宙論的文脈を事例にして考察している。ここでは、第3の事例の引用にとどめよう。上記の「決して完全には具体的に達しない」ということがよく解る事例である。

地球の意味については、それを完全なものにするのは太陽系であり、太陽系の意味については、銀河の全体が疑いもなく私たちにそれをよりよく理解させ、銀河の意味については……つまり、私たちは、どの点でも完全な意味を、したがって、それぞれの語の意味をまったく知らない、ということである。語は新しい問題の汲み尽くせぬ源泉である（Paulhan, 1928, p.328、ヴィゴツキーはこの文章を引用している）。

第2領域、第3領域の本性

さらにポランが意味変動のメカニズムの考察に対して用いているのは、心理学的アプローチである。その第1は、語の意味が変動するための一般的条件についてである。語の意味の変動や多数化は、語と意味が固定的に連合されているとは不可能であり、その程度は様々であるとはいえ、語と意味とが遊離しうることが必要としている。ポランは二種類の遊離をあげている。一つは「語は残ったが、意味は消え去った」（Paulhan, 1928, p.317）という場合である。挨拶をはじめとした社交辞令において、それは典型的に現れている。ポランは「病人たちを例にとれば、『comment allez-vous ? [ご機嫌はいかが?]' という問いかけに『très bien [ええ、とても]』と応えた後に、彼らの一連のうめき声が繰り広げられる」（同上、p.318）という事例をあげている。たしかに、トレ・ビアンのもとの意味、「極めて良い」はそこにはなく、患者の体調と気分はむしろ逆である。日本語でいえば、誰もが使う「ありがとう」は一般的感謝を伝えるときや事態を円滑に進めるときなどに用いられるが、漢字で表記した「有り難う」（あることさえむづかしい）という最上級の意味で使用されるのは稀である。もう一つは、それとは逆に、「語が意味なしに存在することができるのと同じように、意味は語なしに存在することができる」（同上、p.322、ヴィゴツキーはこの文を引用符なしに引用している）という場合である。ポランがあげるのは、本を読んでいるときに「私の眼はテキストにつながっているが、私の思考は眼ととも

にはない」(同上、p.321)という場合である。読書中にふっと、眼はテキストを追っているのに、それとは無関係な事柄が心に浮かぶことがある。そのときの事柄は、眼が対象にしている語・文から遊離しているのに、意味はたしかに心のなかにある。もちろん、読書を続けるのであれば、速やかに思考は眼にするテキストに復帰する。さらに語なしに意味が存在するという明瞭な事例は、「人の名前を一時的に忘れる」(同上、p.322)ことであろう。その人がどのような人か、その人をめぐってどのような出来事があったか、その人の習慣や癖はどのようなものか、等々を記憶のなかから取り出せるのに、その人の名前が出てこない、という状態は、多かれ少なかれ、誰にでもある。記憶のなかから取り出せるものが意味であるとするなら、それらを統合している語(その人の名前)から意味が遊離していることになる。

ポランが用いた以上のような事例は、おそらく例外ではなく規則的なものであろう。語と意味の遊離はあらゆる語においてこれほど顕著に現れることはないとはいえ、こうした遊離が一般的に存在しないとすれば、語の意味の変動や語そのものの変化もありえないからである。

だが、こうした遊離は、語の意味の変動に関する一般的条件なのであって、意味変動のメカニズムそのものの外側にある。ここで内側に入り込まなければならない。すなわち、語の意味の三つの領域はどのような関係にあるのかが、第2の問題である。ポランがナポレオンという固有名詞を事例にして進めた考察を取り上げてみよう。

ある人にとって語が直接に意味するものは、他の人にとってそのようなものではない〔中略〕。たとえば、ナポレオンの名前をあげるなら、それは、ある人には野心家を指しているし、他の人たちには、軍事的天才、あるいは偉大な組織者、あるいは「精力的な教授」、あるいは訓練し自分に従わせる元首を指している。前者はナポレオンが偉大な司令官であったことを知らないわけではないし、後者はナポレオンの野望を否定しようとしているわけではなく、彼らの注意は一つの性格、または、一グループの様態に、直接的に引き寄せられている。他方は意識の薄明かりのなかに遠ざけられている。それは、無意識のなかに沈み込むこともあるし、しばしば消えてなくなることもある。そこではまた、それは語の意味を変形させる原因の一つでもある(Paulhan, 1928, p.299)。

ナポレオンという名前の意味は人によって異なる。この事例では、ナポレオンの内面(野心)に着目するか、実際の歴史的役割に着目するか、によって、意味の相違が生じている。そうした点、つまり、個々人による注目点の違いが、「語の意味を変形させる原因の一つ」と位置づけられている。より一般的な表現を用いるなら、上記の引用は、「各人は自分の尺度にもとづいてあるナポレオンを作り出し、また、その社会的グループや知的グループの尺度にもとづいて、より抽象的なあるナポレオンを作り出す」(同上、p.296)ことを表しており、そうして「作り出」されるものが意味である。このうち「自分の尺度」こそ第3領域の核となるものであろう。

語の意味は、その内部に語義という一般的なものを含み、それと同時に、「自分の尺度」にもとづくものさえ含むことになった。つまり、語の意味はその内部に対立的契機を持つことになったのである。詳述は避けるが、万人に共通なもの(第1領域)と個性的なもの(第3領域)は、客観的なものと主観的なもの、抽象的なものと具体的なもの、知的なものとの情的なもの(「情動の次元の事実」は厳密な語義のなかには入り込めない」同上、p.303)という諸契機を生み出し、ポランに従って語の機能の視点から見れば、記号としての言語 *le langage signe* と示唆としての言語 *le langage suggestion* という二重機能(Paulhan, 1929)を生み出した。語の意味はそれら各二項の統一体として特徴づけられるとすれば、第3領域は各二項のうちの後者の項の性質をあわせ持つものと規定してよいであろう。

少々一般的に言えば、語の意味の変動メカニズムの内側には対立的諸契機が渦巻いており、それらが深部にあるからこそ意味は流動的で変動的になる。ポランにもとづいて、その状態をより具体的に見るとき、意味変動のメカニズムにおける第3領域の意義が明らかになる。ポランは「この〔第3〕領域から、ある要素はしばしば第2領域のなかに移行することができ、また同じく、第1領域のなかにも移行することができる。それはちょうど、他の要素が、離反し・衰弱し・最後には消滅するために、第1領域から出ていくのと同じようなものである」(1928, p.308)と述べている。つまり、意味の変動において、もっとも能動的であるのは各人の尺度にもとづく第3領域である。たとえば、日本語を例にとれば、「全然」という語の両義的意味は、いまや語義の次元に、つまり第1領域に入り込んでいる。最初に肯定の意味でこの語を使い出したのは少数の諸個人であろう。別に申し合わせた訳でもないであろうし、その意味を意識して発案した訳でもない。それは第3領域の内部にあったことは確かである。ところが、その使用法が多数に及んでいったために、生命力を得たのである。この点ではメディアは人々による造語とその使用に対して追従的であり、先導する力はない。「スマホ」という短縮された造語について、大新聞は当初、記事の冒頭で「スマートフォン(=高機能携帯電話、スマホ)」と表記していたが、やがて、つまり人々がスマホの語をより広範に使用するにつれて、「スマートフォン(スマホ)」と書くようになった。もちろん、これはその記事の初出箇所のことで、あとはたんに「スマホ」と表記するのである。いまや記事の見出しに使われるのは「スマホ」である。「第1領域から出ていく」ものは、たとえば、白墨の語である。江戸時代の寺子屋の墨を彷彿とさせる「白い墨」はいまやチョークという外来語が担っている。

語の意味の第2領域は、ポランも確たる定義や概念を与えている訳ではないが、とりあえず、語義(第1領域)と第3領域との混合的領域と捉えておこう。ポランは語の意味の諸領域についていくつもの事例を考察しているが、ここでは三角形の事例を取り上げておく。なぜなら、三角形のような語が広く認められるいくつもの意味を持つとき、「観念・イメージ・行為への傾向」といった「少なくとも心理的事実の三つの異なるシステム」が三角形の語のまわりに潜在し、この語を三つの側面から豊かにする(同上、p.315)、とポランは述べているからである。三角形の定義をひとまず「切り取られた3本の線に囲まれた図形の名」(同上、p.311)としよう。

ポランによれば、この語義(概念)はより狭くなって正確となる。たとえば、子どもがさまざまな機会に三角形について考え、この「3本の線」は曲線であってはならないこと、つまり直線でなければならないと気づく。これを敷衍すれば、語義(第1領域)について考えること、あるいは、行為すること(たとえば作図)を通して語義をより正確にした事例であり、意味の第3領域の要素が第1領域に移行したものと見なすことができる。他方で、「語義そのもののまわりに、語の意味は、様々な傾向や種々の観念をグループ化」(同上)することを通して、語義は多数化し、複雑化して、豊かになる。その状況は次のように描かれている——「様々な状況は、結局、語の放射のなかに、様々な印象・観念・イメージを入り込ませる。すなわち、ギリシャの神殿のペディメント〔三角形の切り妻壁〕、エジプトのピラミッドの外形、ある容器の形状、田舎風の煙突の上に接合された2つの瓦の設計図、である。偶然に、それらのイメージのひとつが、精神のなかで刻印され、ひとつの中心となり、それとは別に、語の意味と語義とを構成するいくつものものを組織し、古いもののある要素だけを保存する新しい意味と新しい語義を組織している。そして、『トリアングル〔三角形、トライアングル〕』はこうして一種の音楽楽器となり、あるいは、船舶が使うための旗となるのである」(同上、p.311～2)。

ポランは明示していないが、これが、第3領域の要素の第2領域への移行であり(第1領域の要素の変形を伴っている)、第2領域そのものの一部を構成している。三角形 triangle の語を仏和辞典および英和辞典で引けば、最初に出てくるこの語の定義の他に、いくつもの転義、派生語が書かれている。これらが意味の第2領域の一部であり、ポランの観点からすれば、第3領域から第2領域に移行してきた要素のうち、歴史的試練に堪えた(より正確には今のところ)生きている意味であろう。なお、上記引用中の「偶然に、それらのイメージのひとつが、……古いもののある要素だけを保存する新しい意味と新しい語義を組織している」とは、概念の網目の動態を表すと考えられよう。さらに敷衍すれば、普通の辞書に載っている意味の横には、主として種々の社会グループのなかでのみ通用する意味(たとえば方言など)もある。さらには、ポランが「ある人にとって語が直接に意味するものは、他の人にとってそのようなものではない」(同上、p.299)と述べるような、ある点では他者とのパロールの過程に登場したばかりで、第3領域の母斑がまだ付いているような意味も、第2領域のなかに位置づけられるであろう。

以上が、ポランが描いた三つの領域から構成される語の意味変動のシステムである。

言語の二重機能——記号と示唆

述べてきたような言語の意味変動のシステムを、記号と示唆という言語そのものの機能から考察していることが、ポランのオリジナルな視点である。彼が「語義、言語的記号 le langage signe の働きに関する統一性の傍らには、言語的示唆 le langage suggestion の果てしない多様性が広がっており、そこでは、その効果はそれ〔言語的示唆〕を使用する者および知覚する者の本性とともに多様である」(Paulhan, 1928, p.294)と述べるように、おおむね記号は語義に、示唆は意味の第2と第3の領域に対応している。この場合、記号が語義を表すのに対して、意味

の多様性は言語的示唆に関わる人間の本性の多様性に根ざしている。

ここから独特な「矛盾」が生じる。——「語義は、少なくとも潜在的には、送信する者と受信する者にとって、話す者と聞く者にとって、明らかに同一のものであり、また、そうでなければならない。意味は、逆に、多様であり、ある人から他の人へと〔伝えるには〕しばしばあまりにも広い」（同上、p.293）。これは語義と意味の矛盾であるとともに記号と示唆の矛盾でもある。これを敷衍すれば、この矛盾は意味の第2領域において顕著に現れるものであろう。第1領域である記号は万人に同一のものであるが、第3領域は語に由来する各人の印象・イメージ・観念・傾向の限りなき多様性に照応する意味の多様性を担うものであり、この二つの領域の内部そのものに矛盾は存在しない。ところが、第2領域は人々の交通過程に深く関わる領域であるため、そこに注ぎ込まれる大量の多様な意味については、一部は拡張的な記号（転義・派生語）に結実し、一部は種々の社会グループだけに通用する独特な記号（方言・隠語など）と化し、一部は記号としての同一性と示唆としての多様性が対立的契機として温存されつづけ、大部分の意味は時間が経てば消えていくのである。ポランに従えば、意味変動のシステムの根底には、同一の語義（概念）から多様なイメージ・観念を抱く人間心理のあり方とともに、記号と示唆という言語の二重機能そのものがある。このような考えは、ポランが行ったようなパロールを素材にして意味変動を考察する試みにとって十分に合理的であり、魅力的でさえある。

Ⅱ. ヴィゴツキーにおける内言の意味論

ここでは、ヴィゴツキーにおける内言の意味論を論じるのに必要とされる限りでの彼の方法論的観点をまず述べ、その後、彼がポランから摂取したものを含む内言の意味論について明らかにすることにした。

語義の非恒常性と発達

ヴィゴツキーもまた、語や語の意味の変動において問題を捉えようとしているが、彼は、語義の「可変性」や「発達」の考察から始めて語の意味に辿りついた。『思考と言語』の主題は言語的思考であり、その第7章のタイトルが「思惟と語」であるので、語義の位置づけから始めるのは理に適っていた。その章においてヴィゴツキーは、言語的思考を検討するには、それを言語と思考に分解し、その各々を研究したあとで両者を結びつけるという諸要素への分解と機械的結合ではなく（そこでは言語と思考が平行的に作用するか機械的に相互作用することが前提されている）、言語的思考の内部において思考と言語のそれぞれの性質を併せ持った部分を研究の単位にすべきである、と言う。そうした単位は語義である（1934/1999, c.275-7）。「語義を奪われた語は語ではなく、空疎な音である」（同上、c.277）ように、「語義は内的側面から捉えられた語そのもの」（同上）である。他方、「語義は心理学的側面からすれば、〔中略〕一般化にはかならず、つまりは概念である」（同上）。こうして、語義は言語の現象であるとともに思考の現象で

あり、「語義は語と思维の統一体である」(同上)。そのように、語義は言語的思考の研究の単位となる。

さらにヴィゴツキーはそのような視点から、ことばと思考をめぐる当時の心理学諸理論を批判的に考察している。詳述は避けるが、連合理論が確立した語義論(ある外套がその持ち主を連想させるように、語がその対象内容＝語義を連想させる)と、連合理論をそれぞれの立場から克服しようとするヴェルツブルグ学派の理論とゲシュタルト理論との、三つの流れが扱われている。

ヴィゴツキーに従えば、連合理論は語彙の増大は説明しえても語の意味的側面を十分に説明できない。「語の音声形式とその対象的内容とのあいだの連合」を意味論の基礎におくと、もっとも具体的な語ももっとも抽象的な語も、すべての語が意味的側面において一様に構成されることになり、すべての語が「ことばそのものにとって特殊なものを何一つ含んでいない」ことになる。ここから、語義の意味構造や語義の心理学的本性の歴史的变化、つまり、言語的思考の低次の原始的な形式から高次の複雑な形式(抽象的概念)への移行、語における現実の反映・一般化の性格の変化が捉えられなくなる(同上、c.278)。

ヴェルツブルグ学派の理論による唯心論からの連合理論の克服の試みは、諸表象の連合の流れに思考を還元できないこと、連合法則の観点からは思维の運動・連結・想起を説明できないことを証明し、思维の流れを制御する独特な法則性の存在を証明しようとした。だが、これは語と語義のあいだの関係に対する連合的見方の再吟味とはなりえなかった。この学派はことばと思考を分離しているからである(同上、c.279)。この学派のなかで、語義を直接の研究対象とし、概念形成を考察したアッハでさえ、連合的傾向およびこの学派に特有の(ことばに依存しない)決定する傾向のために、概念の変化・発達の可能性を失っている。ここでも、連合理論の場合と同じく、「語義が形成された瞬間に語義の発達の道は終わっている」のである(同上、c.280)。

ゲシュタルト理論は、連合理論を全体として克服し、連合原理を構造原理に取り替えようとした。ヴィゴツキーによれば、ことばも思考も構造原理の下に捉えようとする革新的な試みの背後にはこれらの領域における驚くべき後退が隠されている(同上、c.280)。ゲシュタルト理論は語と語義との連関を連合的連関ではなく構造的連関であると考えている、という点は一歩前進である。だが、語と事物の関係がケーラーの実験が明らかにしたようなチンパンジーにおける知的機能、道具と果実との関係とアナロジーに捉えられている点に、後退の根本がある。「どの二つの事物も、棒と果実も、語とそれが表示する事物も、同じ法則にもとづいた一つの構造に結合している」。そこでは、「語は意識における事物を表す」ということが抜け落ちている。つまり、語や語義の特殊性が視野に入っていないのである(同上、c.281)。

こうして、ヴェルツブルグ学派の理論やゲシュタルト理論の進展も、語と語義をめぐる連合理論を手つかずのままに残している。ヴィゴツキーに従えば、語義の形成を語義の発達の終点とするのではなく、「語義の非恒常性・非不変性・可変性と語義の発達との発見」こそが思考とことばとに関する学説を袋小路から抜け出させうるのである(同上、c.284)。

ここにおいて、上述したポランのアイディアとヴィゴツキーの問題意識が交わりを持つことは、明らかであろう。両者はともに語・語義・意味の変動の心理学的解明に挑んだ。ただし、前者の意味論はパロールの次元で語の二重機能(記号と示唆)に辿り着いた。後者は内言(いわば内的パロール)の意味論に進んでいったのである。

ことばの形相的側面と意味的側面

言語には様々なアスペクトがある。語彙、音韻、構文、文法、意味などであり、その各々が学問分科を構成している。ヴィゴツキーは、おそらくフンボルトが唱えたことばの外的形式・内的形式の区分を引き継いだのであろうが、様々なアスペクトを二つの側面にまとめている。それは、形相的 *фазический* 側面と意味的 *смысловой* 側面との二つである。ここで使われる形相 *фаза* は、英語・仏語では *phase* であり、いずれも、「月の相」(月の満ち欠け)という意味がある。形相的側面とはそれに近い。つまり、語彙、音韻、構文、文法などの変化が直接的に感知できる側面である。より厳密に言えば、ことばの形態論的側面と意味論的側面の二つである。ヴィゴツキーはことばや語を考察するときには、たえず、これら形相と意味の二側面を切り離さずに問題を捉えている。それは、子どもの自律言語、外言(話しことばと書きことば)、自己中心的言語(独り言など)、内言のいずれにおいても貫かれている。なぜなら、彼はことばや語はそうした二側面の統一体であると考えからである。

ことばも語もそのような二側面の統一体であるとはいえ、それは「複雑な統一体」であって、けっして「均質」でも「一様」でもない。ヴィゴツキーが述べるように、「ことばの内的・意味的・意味論的側面と外的・音声的・形相的側面は、真の統一体を形成しているとはいえ、それぞれが独特な運動法則を持っている」(同上、c.285)。それら二側面は照応的・整合的に運動しあうというよりは、むしろ、対立的に運動する。これが問題を深く捉えようとするヴィゴツキーの独創的な観点である。

ヴィゴツキーはそのような対立的運動を表す事例をいくつも挙げている。ここでは、そのうちの一つの事例の考察を紹介しておこう。

それは、子どもが獲得する最初の有意味語(一語文)から始まることばの二側面の発達についてである。その発達は正反対の方向に進む。ことばの外的・形相的側面は、単語→2～3の語の結合→フレーズ→文→より複雑な文というように、部分から全体へと発達する。他方、ことばの内的・意味的側面は、全体から、つまり文(一語文)から始まり、後になって部分的な意味的単位、個々の語義の獲得に移行するというように、全体から部分へと発達する。だが、この二側面の反対方向へのそれぞれの運動はけっして自律的・独立的な運動ではない。ヴィゴツキーの言うところでは、「子どもの思惟が[全体から]分節化し個々の諸部分からなる構成に移行するのに応じて、ことばにおいて子どもは部分から分節化された全体へ移行する。また逆に、ことばにおいて子どもが部分から文という分節化された全体に移行するのに応じて、子どもは思惟において未分化な全体から諸部分に移行しうる」(同上、c.286)。このように二側面は

相互に支えあいながら反対方向に発達するのであり、その意味で両者にあるのは「一致であるよりはむしろ矛盾」である(同上)。ついでに言えば、このような複雑なことばの動きについて連合理論には説明不能であることは、明らかであろう。

内言の二側面についても若干触れておこう。ヴィゴツキーは機能の観点から外言と内言とを根本的に区別している。他者との交通のために用いられる他者のためのことばである外言に対して、内言は自己のためのことばである(「内言は自己のことばである。外言は他者のためのことばである」同上、c.295)。興味深いことには、独り言などの自己中心的言語は音声の面では外言的であるが、機能の面ではそうではなく、むしろ内言的である。内言の機能の措定については、そのような自己中心的言語をめぐるピアジェに対する批判実験から導き出されたものである。すなわち、思考の機能の担い手、さらには心理機能の担い手が自己のためのことばという内言の根本機能から派生する現実的機能である。なお、「他者のための」と「自己のための」という特徴づけは、ヴィゴツキーが文化的発達的一般法則と考えた「即自 в себе」—「対他 для других」—「対自 для себя」のヘーゲル的な流れに照応している、と思われる。

だが、内言は他者には聞こえず、他者からは直接的に感知できないものである。内言を具体的に掌握するためには、機能的に類似する自己中心的言語を比較的・発生的に考察することや、機能の異なる外言における類似と考えられる現象を考察するなどの、間接的な分析が必要とされる。ヴィゴツキーは、書きことば、話しことば、自己中心的言語(主として独り言)、内言の機能的・発生的比較から、内言の形相的側面の特徴づけを得ている。すなわち、それは、主語を省略した述語主義であり、ことば・語の凝縮性である。つまり、「内言は、正確な意味において、ほとんど語のないことばである」(同上、c.322)。言い換えれば、音声を失い、主語を失い、単語であることさえ必要でない、語のかけらにすぎないことこそ、内言の形相的側面に関する規定である。ここで重要となるのは、このような独特な形相的側面を持つ内言においては、当然ながら意味的側面も独特となり、二側面の相互関係が外言にはない独自性を帯びることである。この相互関係について、ヴィゴツキーはひとまずの規定を与えている——「ことばの形相的側面、構文法、音声は最小限にまで達し、最大限に単純化され凝縮される。前面に現れてくるのは語義である。内言は主としてことばの意味 семантика を扱うのであって、音声 фонетика ではない。ことばの音声的側面からの語義の相対的独立性が内言において極めて突出して現れてくる」(同上、c.322)。だが、そうした独自性を具体的に把握するためには、意味論そのものと内言の意味論を深める必要がある。ここにポランへの参照が始まるのである(なお、ことばに関するヴィゴツキーの方法論的観点を全体として明らかにするためには、さらに、機能的次元と発生的次元の関係、および、機能と構造の関係の二つを考察しておく必要があるが、紙幅のために、省略しておきたい)。

ヴィゴツキーはポランをどう読んだか

以上のように内言の意味論の解明を課題にしたヴィゴツキーは、内言の意味論の三つの特質

を指摘する。その第1の特質は、ポランの所説から導き出される「内言における語の意味の語義に対する優越」(Выготский, 1934/1999, c.322)である。ヴィゴツキーはポランのアイディアを考察するにあたり、ポランがなしたことの心理学的分析への功績を柱にしてそのアイディアをまとめている。

ポランの功績の一つは、ことばの考察に語義と意味とのあいだの差異を導入したことである。語によって発生する心理学的事実の総体としての意味のなかにある相対的に安定した領域としての語義という規定を受け入れつつ、ヴィゴツキーは、その規定を「力動性」の相において、つまりは「文脈」において捉えている。語は文脈が異なればその意味を変化させるが、語義は「不動・不変の一点」のように相対的に安定しているように見える。意味が文脈に応じて変化することこそ、ことばの意味論的分析の基本的要因となり、実は、この意味の変化が語義さえも変化させる(「現実の語義は恒常的ではない」。「ある扱いにおいて語はある語義を持って現れるが、他の扱いでは語は他の語義を獲得する」同上、c.323)。その面では、語義は「生きたことばのなかに実現される潜在力 *потенция* 以上のものではない」(同上)ことになる。

ところで、語義の変化とはどのようなことか。ヴィゴツキーは、クルイロフの寓話の事例をあげたあとで、「意味による語の豊富化」こそ「語義の力動の法則性」(同上)であると述べる。これを具体的に、語は、それが編み込まれるあらゆる文脈から、知的・感情的内容を摂取・吸収し、文脈の外側で語義に含まれるものよりも大きく、そして小さく、意味しはじめることだ、と言う。「大きく」とはその語が多文脈で使われればそれだけ語義が深化し多様化することであり、他方、「小さく」とは、ヴィゴツキーは「語がある文脈においてだけ指し示すものによって、語の抽象的語義が限定され圧縮されるからである」とやや漠然と述べているが、この点では、前述したポランの三角形の事例(「三つの線」は曲線ではいけないという限定)を想起されたい。

いま一つのポランの功績は、語と語義の関係に比べて、語と意味の関係ははるかに独立的である、と示したことである。つまり、「語が意味なしに存在しうるとすれば、意味は同じ程度に語なしに存在しうる」(同上、c.324)ことである。前者は語の慣用的使用において存在し(ヴィゴツキーも触れているが、ポランの引用した事例、患者との会話である、「Comment allez-vous ?」—« Très bien »を想起されたい)、後者はポランが、その人のことはよく知っているのに、その名前を一時的に忘却することがある、という事例や黙読時の雑念の事例に該当しているであろう。それと同時に、語から解離した意味は他の語のなかに入り込み定着することもある。これは、語そのものの変動の一つの現れ方であろう。

以上のような、パロールを念頭に置いたポランの意味論の功績を、ヴィゴツキーは内言の意味論へと移し替えようとする。すなわち、パロールは通例、意味のもっとも安定し恒常的な領域である語義から、より流動的な領域、語の全体としての意味へと進んでいく。内言においては、逆に、パロールにおいて弱々しく現れている「語義に対する意味の優越」が極限まで進み、絶対的形式において表される。内言においては、「語義に対する意味の、語に対する文の、文に対

する文脈全体の優越が、例外ではなく、恒常的な規則となる」(同上、c.324)のである

こうして、「語の意味の語義に対する優越」とは、意味が全体で意義が部分であるという量的な意味ではなく、語義さえも変更する語の変動を推進するものは意味にあることである。

「ポランが述べるところによれば、語の意味は、個の意識によって、同じ意識にとっては状況によって、明らかに、絶えず変化している複雑で可動的な現象である」(同上、c.323)——とヴィゴツキーが述べるように、意味の優越とは、ポラン流に言えば、語の第3領域の要素が第2領域、第1領域に移行していくことに類似している。そして、ヴィゴツキーはポランの所説を全体として肯定しながら、パロールの意味論を内言の意味論に深化させ、「意味の語義に対する優越」が極限にまで進んだものを内言の意味論の第1の、おそらくは最重要な特質としたのである。ヴィゴツキーが取り出す内言の意味論の第2、第3の特質はここから生まれてくる。

膨大な意味を吸収する語

ヴィゴツキーが内言の意味論の第2の特質と指摘するものは、語の結合、組み合わせ、合流に関するものである。そのうちの一つは、「膠着」に近く、いま一つは稀に見られる語結合の様式としてドイツ語の場合に近いものを代表例としている(同上、c.324)。膠着とは一般に、たとえば日本語で二つの語が結合されて一つの語のように機能することを指し(膠着語)、「私は」「私が」「私の」……というようなケースがそれに当たる(英語・フランス語などは屈折語に分類され、《I》《my》あるいは《je》《mon または ma, mes》と一語で表される。もっともロシア語では人称代名詞にかぎらず基本的にはあらゆる名詞が格変化をするのであるから屈折語の最たるものの一つであろう)。明示されていないが、ドイツ語における語結合の場合では、たとえば英語での East station、フランス語の Gare de l'Est が Ostbahnhof の一語で表されることを示しているであろう。もっとも日本語においても東駅は固有名詞としては一語である(パリ東駅、ベルリン東駅のように)。ヴィゴツキーはこれに類した語結合が内言のなかに生じていると考えているが、その根拠としているのは自己中心的言語の分析である。すなわち、「私たちは子どもの自己中心的言語のなかにも類似したものを発見した。この形式のことばが内言に近づくにつれて、複雑な概念を表現するための一つの複雑な語を形成する様式として、膠着がますます頻繁に、ますます明瞭に現れてきた。子どもはその自己中心的発話において、自己中の言語係数の低下と平行して、語の非構文的合流へのそうした傾向を顕わにするのである」(同上、c.325)。残念ながら、ここには自己中心的言語における上述の語結合に類した事例が示されていない。

そうした第2の特質は、主として形相的側面に関するものに見えるが、次の第3の特質と合わせると、内言の意味的側面と深く結びついていることが明らかになる。第3の特質は、語の意味の流出 *влияние*・流入 *вливание* と関わっている⁽³⁾。ヴィゴツキーは上述のような自己中心的言語にみられる膠着などの語結合を「意味の流出〔流入を含む〕」と名づけている。つまり、独特な様式の語結合の内部には、「意味はあたかも相互に流出しあい流入しあっているかのようであり、そのように、先行する意味は、あたかも後続する意味に含まれ、その意味を変

形するかのである」(同上、c.325)という語の意味の流出・流入がある。たとえてみれば、ドイツ語における Osten と Bahnhof とから意味が流出し、新しい一語 Ostbahnhof に流入したようなものである。これが内言における語結合において語義と比べて語の意味がより広範に動的となることの証の一つである。ヴィゴツキーは類似した現象を外言のなかに、とりわけ「芸術的ことば」のなかにも見出している。文学的ことばにおいては、作品名である名前が作品の全内容を想起させる。たとえば「ドン・キホーテ」「ハムレット」「エヴゲニイ・オネーギン」「アンナ・カレーニナ」などである。その名前は、「語に込められた意味的諸単位のあらゆる多様性を吸収し、その意味にもとづいて、あたかも作品全体の等価物になるかのようなものである」(同上)。つまり、作品全体のあらゆることばから流出した意味が、名前という一つの語のなかに流入したのである。

ヴィゴツキーによれば、芸術的ことばにおけるそのような語の意味の流出・流入の典型的事例はゴーゴリの小説「死せる魂」に見出される。そこでは、二つの国勢調査のあいだに死亡した農奴をリストアップし、そのリストを売り買いして、つまり詐欺によって金を儲ける商人と地主がリアルに描かれている。小説を読み終わった読者は、作品名が死亡した農奴の売り買いに関わる点では「死せる農奴」であるが、登場する主人公たちは生きてはいても精神的には死んでいるという点では「死せる魂」であるという作品名の意味を理解する。ロシア語では一つの語 душа の語義が「魂」および「農奴」を指し示すのであるから、二重の意味が小説の内容と相俟って顕わになる。つまり、作品名である語に作品全体の意味内容が流入しているのである。

ヴィゴツキーは、内言においても類似したことがもっと徹底して起こる、と推定している。「内言においては語は外言におけるよりもはるかに多くの意味を担っている」。それはゴーゴリの小説の作品名と同様に、「内言においては、膨大な意味内容が一つの語という容器に注ぎ込まれる」からである。内言における語は「意味の濃縮された凝結物」(同上、c.326)である。

「語の意味の語義に対する優越」のテーゼは、以上のように、ヴィゴツキーの内言の意味論に機軸を与え、内言の二側面の複雑な運動の解明をもたらした。内言において、形相的側面は限りなく縮小されていくのに応じて、意味的側面は限りなく深化し膨大なものになっていく。それは、小説を含む外言が他者のためのことばであるのに対して、内言は自分のためのことばであるからに他ならない。

* * *

最後に、ヴィゴツキーの内言の意味論が持つ実践的・現実的意義について、簡単に触れておこう。それは、内言から外言への移行、つまり、自己のなかで内言が担う意味を外に向かって表現するという問題である。ヴィゴツキーの内言の意味論からすると、そのような表現をめぐる《自由と苦しみ》が根源的には内言のなかに、内言の形相的側面と意味的側面との特殊な関

係のなかにある。極度に縮減され語のかけらにさえ化す語の形態と、膨大にふくらんでいく語の意味。語(または語のかけら)に膨大な意味が流出・流入するということは、意味はそのふくらみに等しい語のふくらんだ固定的な形態をもっていないということである。ここから、ステレオタイプではなく、話しことばにも、書きことばにも、芸術的なことばにも、意味は自由に姿を変える。外言への移行とはそのようなものである。そうした自由な諸形態のみならず、自己にふさわしいことばを見つけた意味はその人の意味(ポランの言う意味の第3領域)にほかならず、そこに表現の自由の言語論的・心理学的基礎がある。

だが同時に、同じものが表現の苦しみをもたらす。その苦しみを明瞭に示すのは、内言の意味的側面は発達しあるいは保存されているのに、疾病のために、ことばが自由にならない事例である。自閉症と診断された14～5歳の少年は(東田、2007、p.13)、発話しようとするとき、ことばが消えていく、と書いている。その少年の場合、母親や支援者が考案した紙の文字盤(キーボード)を指で打つことで、ことばをつなぎとめている(まるでヴィゴツキーが言うような外部の媒介がそうしているように)。また、失語症の専門家、クルト・ゴールドシュテイン(1948、p.98)は、ヴィゴツキーのアイディアは「内言の未分化の現れと考えたいある複合的兆候」の理解を促すと述べて、ヴィゴツキーの内言論に賛意を表明した。その兆候は詳しく述べられていないのでそれに該当するかどうかはわからないが、筆者がその家族に取材したある失語症患者は、リハビリテーションの過程で、錯語に苦しむ時期があった。例えば、この患者は消しゴムの絵を見て、それが間違いだと解っており、また頭のなかには消しゴムの像が浮かんでいるのに、何度もエンピツと答えてしまうのだった。これらの事例からは、その苦しみが脳の変調(後者においてはヴェルニケ野の)と関わって生み出されているとはいえ、それはことばの次元で言えば、語の形相・意味の二側面の「対立性」が顕わとなった特徴であると看取できる。

こうした苦しみは、これらの人たちと比べてことばを自由に手にしている私たちにも出現するであろう。ヴィゴツキーが述べたように、一語に流れ込んだ意味を一連のパノラマに展開することは、ゴーゴリの作品名の意味を完全に解明すべく、それを「死せる魂」の全文に展開するようなものだ(1934/1999、c.326)、とすれば、一つの部分的問題でさえ自己が抱えている意味のすべてをとうてい語り尽くせるものではない。ことばの観点から言えば、人間は余すところなく自己を語ろうとして、絵や写真や映像や音楽を創りだしたと言えるであろう。しかし、表現の形態が拡がれば問題が解消する訳ではない。表現の自由と、自分がされて嫌なことは他者にしないというホッブス流の自然法的内在的制約(『リヴァイアサン』第1部第15章)とが完全に実現された社会的諸条件においても(残念ながら私たちはそうした諸条件をすみずみまで実現していない)、それでもなお、ことばと芸術によって表現しきれないもの、語りきれないものが人間には残る。なぜなら、ポランが述べそれをヴィゴツキーが引用したように、語の意味を完全には理解しえないという点で、私たちは語の意味を知らないのであって、個人の次元においても、完全な意味を探し求める他はないからである。

ヴィゴツキーが論究した慣用句法 *идиотизм*、ポドテキスト *подтекст* などの問題について、

彼がポランから摂取した「語の意味の語義に対する優越」や「語と意味との相対的に独立的な関係」という観点、さらにはポランの意味論そのものの観点から、それぞれの意義を考察することが、紙幅の制約の故に残されている。別の機会に論じることにはしたい。

(未完)

注

- (1) ウェブ版からの引用のためページは特定できない。
- (2) ウェブ版からの引用のためページは特定できない。
- (3) влияние〔ヴリヤーニエ〕を「流出」、вливание〔ヴリヴァーニエ〕を「流入」と訳した。柴田義松の訳では前者を「作用」、後者を「注入」とし、それぞれに露語を示すルビがふられている(2001、p.418)。ヴィゴツキーは、前者は後者を含むような意味で用いられるのが、内言の特質を表すのに適している、と考えている。筆者はこれら二語の翻訳にあたり、語・文・章・書物などの語への意味の移動のメカニズムを表すのに適していること、一方が他方を含み込むことが意味をなすにはこの二語に何らかの対立的契機があり、できれば対になる訳語が望ましいこと、内言においてはかすかに心のなかに語の存在は感じられても意味の移動の過程は意識されず、意識のなかにありながら意識されない状態を表す一種の「客観性」を帯びた訳語が望ましいこと、などを考慮した。ことばの問題としては、влияние〔普通には影響〕はフランス語の influence の借用語であり、そのフランス語の古語には「感応力〔天体から流れ出て人間や事物に影響を与えると考えられていた流体〕」という意味があること、また、вливание と同根の動詞 влиться, вливаться には「流入する」という訳語があること、その対をなす вылиться, выливаться は「流れ出る」である。以上を総合して、「流出」「流入」とした。

文献

- Ахутина, Т. В. (1984) Теория речевого общения в трудах М.М. Бахтина и Л.С. Выготского, Вестник Московского университета. Серия 14. Психология. 1984, №3, с. 4-13. [アフーチナ：バフチンとヴィゴツキーの著作におけることばの交通理論]
- Akhutina, T. V. (2003) The Theory of Verbal Communication in the Works of M.M. Bakhtin and L.S. Vygotsky, Journal of Russian and East European Psychology, vol. 41, no. 3, May-June 2003, pp. 96-114.
- Goldstein, K. (1948) Language and language disturbances, N.Y. Grune & Stratton.
- 東田直樹(2007) 自閉症の僕が跳びはねる理由、エスコアール出版部
- Paulhan, Fr. (1928) Qu'est-ce que le sens des mots. Journal de Psychologie, v. 15. [ポラン：語の意味とは何か]
- Paulhan, Fr. (1929) La double fonction du langage, Librairie FÉLIX ALCAN. [ポラン：言語の二重機能]
- Veer, R. van der; Valsiner, J. (1991) Understanding Vygotsky. A quest for synthesis, Basil Blackwell.
- Выготский, Л. С. (1934/1999) Мышление и речь, Лабиринт. [ヴィゴツキー：思考と言語]
- ヴィゴツキー(2001) 思考と言語、柴田義松訳、新読書社